小中連携の9年一貫で取り組む品格教育5年間の効果 (1)

○青木多寿子¹・井邑智哉²・野中陽一朗³

(¹広島大学大学院教育学研究科, ²精華女子短期大学, ³兵庫教育大学)

キーワード: 品格教育, 学校全体での取り組み, 介入の直接効果

Whole school approach of character education during compulsory education

Tazuko AOKI¹, Tomoya IMURA², and Yoichiro NONAKA³

(¹Graduate School of Education, Hiroshima University, ²Seika Women's Junior College, ³Hyogo University of Teacher Education)

Key Words: Character Education, Whole School Approach, Direct Effects of Intervention

目 的

品格教育とは、子ども達がよい行為の習慣をつくるように支援する教育である。その方法として責任、根気など、核となるテーマを共通に定め、それらを通して、児童生徒が主体的により行為の習慣づくりに取り組めるように励ましていく。これまで品格教育を牽引してきた Ryan (2010) は、子どもがよい人間になるためには、よい習慣をつくり、よくない習慣を削ること、そしてそのことは自分自身にしかできないことであることを子どもに理解させることが重要であると指摘している。品性や品格といったものは、それを具体的に発現する習慣によって示される (新, 2011)。つまり品格教育とは、よい行為について、それがどのようなものかを知り (knowing)、よい行為をとれるようになることを望み (desiring)、よい行為を実際に行うことで (doing)、子ども達が自分自身の生活を良い方に導くように援助してゆく教育であり、知力の習慣 (habit of the mind)、心の習慣 (habit of the heart)、そして行為の習慣 (habit of action) から成り立つ“三つのH”の教育だと言われている (Lickona 1992 三浦訳 1997)。本研究では、教育委員会主導で、学校だけでなく、家庭や地域を巻き込み、小中連携で長期にわたって包括的に取り組む品格教育、すなわち様々な品性に関わる“よい行為の習慣作り”を実践し、その教育効果を検証することを目的とする。

方 法

調査対象者

ある地域の教育委員会を通して、その地域の公立学校に通う児童生徒が対象となった。期間は平成19年から平成24年である。教育実践は、小中学校に通う全学年の児童生徒に対して行ったが、教育効果の測定については、そのうち小学校4、6年生と中学2年生に対して行った。

品格教育の実践方法

学校現場での取り組み “挨拶”、“思いやり”、“責任”、“良心”、“勇気”、“公共心”、“フェア”、“感謝”、“やりぬく心” という9種類のテーマについて、月にひとつのテーマを取り上げ、1年間で

一サイクルするカレンダー方式の品格教育を行うように設定されていた。また、それぞれの学校の問題にあわせて、月のテーマを設定できる月も用意して、学校独自のオリジナリティが出せるように工夫した。さらに、指導書では、教師が毎月のテーマに合わせて説教をしたり、テーマを押しつけたりしないように、つまり児童生徒が自主的によい行為の習慣を身につけてゆく工夫ができるようにすることが明記されていた。毎月指定された品格のテーマと、テーマに対する考え方、指導の仕方以外の取り組みの具体的内容は、各学校に任されている。一般的な方法としては、全学校区で共通の毎月のテーマについて、例えば、月の最初の全校朝礼で、“責任”の月なら“責任”に関わる校長や他の教員による講話を聞いたり、責任について道徳の授業で取り上げたり、そのほか、責任に関わる自分の今までの行動を振り返り、自分で考えて目標を立て、行動する活動を行った。また、テーマと具体的なよい行為の習慣が一目でわかるポスターを、各学校の各学級、廊下等に掲示してもらった。

家庭・地域への働きかけ 品格教育では学校教育場面だけでなく、保護者やコミュニティを巻き込み、家庭でも声をかけてもらうことが推奨されている (e.g., Tomahawk Ridge Elementary School, 1998)。保護者や地域の方々にも上記で示した月ごとのテーマを知っていただき、関心を持ってもらい、学校・家庭・地域が連携して子どもの品格を高めようとする風土を形成するように努めた。

教育効果の測定尺度

(a) 児童生徒用品格尺度 (井邑他, 印刷中), (b) 生活充実感尺度 (高橋・青木, 2010), (c) ソーシャルサポート尺度 (中上・野口, 2004; 以下, SS 尺度と略記する), (d) ホープ尺度 (Snyder, 2005), (e) 主観的幸福感尺度 (島井他, 2004)。

結 果

平成19年から平成24年までの品格得点 (“根気・誠実”, “勇気・工夫”, “寛大・感謝”, “フェア・配慮”) について各下位尺度得点の平均値と標準偏差を Table 1 に示す。中学校で、4年目くらいから得点が上昇傾向になり、小中連携の効果がられる様子が窺えた。

Table 1 学校種別にみた4種類の品格得点の平均値 (SD)

	小学生					
	H19 (実践前) (N = 332)	H20 (1年目) (N = 995)	H21 (2年目) (N = 678)	H22 (3年目) (N = 1395)	H23 (4年目) (N = 950)	H24 (5年目) (N = 453)
根気・誠実	2.96 (0.72) ^{a)}	2.74 (0.67) ^{b)}	2.78 (0.77) ^{b)}	2.76 (0.68) ^{b)}	2.88 (0.72) ^{a)}	2.75 (0.67) ^{b)}
勇気・工夫	3.04 (0.61) ^{a)}	2.94 (0.59) ^{b)}	2.89 (0.68) ^{b)}	2.90 (0.56) ^{b)}	3.04 (0.59) ^{a)}	2.91 (0.56) ^{b)}
寛大・感謝	3.24 (0.58) ^{ab)}	3.14 (0.57) ^{b)}	3.19 (0.63) ^{ab)}	3.17 (0.58) ^{b)}	3.26 (0.56) ^{a)}	3.23 (0.56) ^{ab)}
フェア・配慮	2.84 (0.71) ^{ab)}	2.75 (0.66) ^{b)}	2.74 (0.71) ^{b)}	2.73 (0.68) ^{b)}	2.85 (0.68) ^{a)}	2.83 (0.64) ^{ab)}
	中学生					
	H19 (実践前) (N = 146)	H20 (1年目) (N = 315)	H21 (2年目) (N = 316)	H22 (3年目) (N = 369)	H23 (4年目) (N = 401)	H24 (5年目) (N = 195)
根気・誠実	2.58 (0.68) ^{ab)}	2.46 (0.72) ^{b)}	2.46 (0.73) ^{b)}	2.52 (0.67) ^{ab)}	2.50 (0.72) ^{b)}	2.68 (0.74) ^{a)}
勇気・工夫	2.59 (0.63) ^{b)}	2.60 (0.62) ^{b)}	2.57 (0.64) ^{b)}	2.67 (0.58) ^{b)}	2.76 (0.59) ^{a)}	2.88 (0.62) ^{a)}
寛大・感謝	2.90 (0.59) ^{b)}	2.88 (0.63) ^{b)}	2.86 (0.63) ^{b)}	2.91 (0.61) ^{b)}	2.96 (0.59) ^{b)}	3.12 (0.61) ^{a)}
フェア・配慮	2.57 (0.64) ^{bc)}	2.65 (0.70) ^{c)}	2.52 (0.73) ^{c)}	2.62 (0.65) ^{bc)}	2.68 (0.69) ^{ab)}	2.81 (0.71) ^{a)}

注1) 多重比較の結果、年で有意差 ($p < .05$) のあった条件を異なる記号で示す。